

スタッフルーム
Staff room

アナログゲームの魅力

もりおか ゆうすけ
森岡 祐介

(メディアセンター本部)

「カタン」「街コロ」「キャットアンドチョコレート」。これらの言葉を聞いたことのある方はいるだろうか。すべて『アナログゲーム』の名前である。

アナログゲームというと馴染みのない言葉のように感じるかもしれないが、「トランプ」「ウノ」「人生ゲーム」、最近話題になっている「将棋」と聞けば、いずれかはやったことがあると思う。

筆者はこのアナログゲームに夢中になっている。40種類以上持っており、自宅や旅行先で友人や家族と遊んでいる。そこで本稿では、みなさんにアナログゲームの魅力についてお伝えしたいと思う。

1 きっかけとなったドイツのアナログゲーム

友人の影響でアナログゲームを遊ぶ機会があったが、ここまでのめり込んだきっかけはドイツ旅行で多くのゲームに出会ったことである。

アナログゲームが最も盛んなのはヨーロッパ、特にドイツである。ドイツでは週末や休暇を家族や友人と集まってゲームをして過ごすなど、ゲームが生活の一部になっている。そのためか玩具店だけでなくデパートや書店でも大きく売り場が割かれていたし、多くの図書館で貸し出しも行われている。

このようにドイツで娯楽の定番となっているアナログゲームは、パッケージがおしゃれなデザインであったり、駒がプラスチックではなく木製で手触りが良かったり、様々なこだわりが詰め込まれている。

またドイツではアナログゲームのデザイナーの名前がパッケージに明示されている。これはドイツでゲームデザイナーの社会的地位が非常に高いためである。例えるなら、村上春樹の新しい小説が出るとファンが購入するために書店に列を作り大きく話題になるように、ドイツでは有名なデザイナーの名前は売上に影響を与える程の重要な要素であり、サブカルチャーとしてではなく文化としてアナログゲームが確立されていることがわかると思う。

2 幅広い対象年齢・参加人数・プレイ時間

ビデオゲームと同様にアナログゲームにも対象年齢や参加人数、プレイ時間などの条件がゲームごとに設定されている。この設定の幅広さも魅力の一つである。例えば同年代の友人と遊ぶのか小学生の甥と遊ぶのか、何人くらいの人数で遊ぶのか、じっくり遊ぶのか短いゲームを何度も遊ぶのかなど、場面によって適したゲームを選ぶことができる。

3 今流行の協力系・正体隠匿系

アナログゲームにはいろいろな種類があるが、今流行っているアナログゲームに協力系・正体隠匿系というものがある。

協力系とはプレイヤー同士で勝敗を競うのではなく、相談・協力しながら目標をクリアすることを目指す。協力し合うので初心者から上級者まで楽しめるゲームである。例えば「パンデミック」というゲームは協力して感染症から世界を救うゲームで、難易度が高くやりごたえがある。

正体隠匿系とは、自分の役割やチームを隠しながらそれぞれの目標を達成するゲームだ。「人狼」というゲームを知っている方もいると思うが、会話をしながら味方になりすました「人狼」を見つけるというゲームである。これはテレビで取り上げられるほど有名で、様々な種類の人狼が作られている。

協力系・正体隠匿系に共通する魅力として、対面でのコミュニケーションが必要不可欠という点があると思う。ビデオゲームが主流となる中、会話が求められるということが新鮮に感じられるのかもしれない。

ここまで真面目に説明してきたが、やはり実際にやってみるのが一番である。最近では家電量販店の玩具コーナーでも販売しているし、ボードゲームカフェで体験することもできる。今アナログゲームを始める環境は十分に整ってきていると思うので、本稿をきっかけにぜひ挑戦していただき、一人でも多くのアナログゲーム仲間ができることを願っている。